

茶ぐわ〜 ゆんたく

お茶を飲みながら、
ぎのわんの歴史を
のぞいてみませんか？

177

港のある風景

上の写真は、1978(昭和53)年頃の宜野湾漁港です。宜野湾市の漁場は、北谷との境界から浦添との境界までの範囲で、北谷との境界は現在の北前と伊佐との間にある橋から真北、浦添との境界は現在の牧港のA&W付近にあった碑文から真北で、その範囲が漁場でした。戦前の漁業従事者は専業が5〜6人ほどで、兼業が20〜30人ほどでした。写真当時は、浦添・宜野湾漁業協同組合等を中心に近海はえ縄漁でタマン、チン、クチナジ、エーグワな



▲1978(昭和53)年頃 宜野湾漁港



▲1990(平成2)年 仮設港(大山)



▲2018(平成30)年 宜野湾漁港

宜野湾漁港は県によって第八次漁港整備長期計画に基づき建設されました。

【問合せ】
市立博物館 ☎870-9317

どを捕っていました。海域と海岸には実に多くの名前があり、まさに人々が海と共に生きてきたことが分かります。そして、はるか昔から海から豊かな恵みを受けてきたことは、真志喜の安座間原遺跡から大きなシャコガイやイモガイ類、アオブダイなどのサンゴ礁の魚類が大量に出土したことからわかります。

時代の急激な変化は宜野湾市の海を大きく変えていきました。豊かな海を支えてきた北谷の桑江から浦添の牧港に至る広大なイノーは、埋立てにより今日ではみる影もありません。海と陸との接点であったイノーには新たな陸地が出現し、わずかに残された宇地泊の地先に昔の様子を伺い知るだけです。現在、宜野湾漁港では、11月〜6月の間セイイカ漁を行い、夏はアカマチなどの一本釣りを行っています。



【其の41】

はじめに
今月は、西普天間住宅地区跡地で文化課が実施している埋蔵文化財調査についてご報告します。

発掘されたミーガー

西普天間住宅地区跡地の西側は急な斜面地形と緑地がほぼ当時のまま残っていることが判明しており、この緑地北側には、国指定史跡である喜友名泉をはじめ、喜友名ナヌカーと呼ばれる湧泉群が分布していたそうです。

当課では、昨年7月に、ナヌカーの一つであるミーガーがあったとされる場所の発掘調査を実施しました。調査前は、ミーガーが存在すると思われる場所で、土砂の隙間から少量の水が湧き出している状況でした。ミーガーはこの水が湧いている場所、つまり、土砂の下に埋まっているのではと考えました。調査の結果、ミーガーが当時の様相そのままの状態が発掘されました。

ミーガーの造り

ミーガー正面は、石灰岩の切石を利用した布積みにより精巧に組まれ、樋口からは今も水が流れていることが確認されました。また、前庭部は石積みで囲われており、床面に石が敷かれる



【問合せ】
文化課 ☎893-4430

など、隣接する喜友名泉やバシガーとは構造が異なることも判明しました。この前庭部から流れる水は、庭囲いの石積み北西隅に設けられた暗渠あんきょを通じて当時の水田へ流れていたと思われるそうです。

ミーガーは、喜友名地域の人々にとって日々の農作業や生活用水として日常的に利用されていた湧泉でしたが、米軍施設の建設によって永く人々の生活から切り離されてしまいました。

今回の調査によって数十年振りに発見されたミーガー。今後は、整備のための調査や活用方法などについて検討していくこととなります。